

介護福祉士養成校におけるレクリエーション教育及び介護実習での レクリエーション実践

Recreation education in care worker training school and recreation practice in nursing care training

吉 田 志 保*

Yoshida Shiho

Abstract:

In this study, we clarified the implementation status of the recreation therapy subjects that had been removed from the curriculum of care work welfare school.

The questionnaire survey also showed how students enrolled in the care work welfare school practice providing recreation therapy through nursing care training.

Of the care work welfare school in the Kanto Koshinetsu region, more than 60% schools were providing recreation therapy practicum.

From these results, it became clear that care work welfare school are conducting recreational subjects as their own subjects out of their necessity because they have been removed in the new curriculum.

In Practical Training II, 31 students (41.8%) performed recreation therapy not only led by staff but also planned by trainees.

However, recreation therapy planned by students refers to recreation therapy originality conducted at facilities rather than recreation learned at school, and it is clear that techniques that are taught at school are not utilized in practice.

キーワード：

介護実習、レクリエーション実践、レクリエーション教育、介護福祉士養成校、認知症の非薬物療法

1. はじめに

1987（昭和62）年、社会福祉の最初の国家資格として、「社会福祉士法及び介護福祉士法」が制定され、「社会福祉士」及び「介護福祉士」が誕生し32年が経過した。

養成校での介護福祉士養成のカリキュラムについては、2度のカリキュラム改正が行われ、その中で従来の「レクリエーション」の科目は廃止され、「生活支援技術」の中でわ

ずかに組み込まれることとなり、独自の科目としては無くなった。

しかし介護福祉士は、単に利用者の身体のケアにとどまらず、その人がいきいきと楽しみや生きがいを持ちながら、生活できるよう支援していく必要がある。レクリエーションは生活の中に楽しさを提供したり、コミュニケーションを図る効果があり、認知症の非薬物療法としても活用できる。

*佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科 Sano Nihon University College Senior Lecturer

本研究では、レクリエーションの知識や技術が介護福祉士に求められていることを実践の中で明らかにしたいと考える。

II. 研究目的

1. 「レクリエーション」の必要性から、介護福祉士養成校におけるレクリエーション科目の実施状況について調査し明らかにする。
2. 介護福祉士養成校に在籍している学生が、養成校でどのようなレクリエーションを学び、介護実習を通してどのように実践しているのかを、質問紙調査を通して明らかにする。
3. 本研究を通じて、今後の介護福祉士養成校におけるレクリエーション教育の在り方についても、明らかにする。

III. 研究の視点および方法

1. パンフレット及びホームページによる調査

(社)日本介護福祉士養成施設協会(以後、介養協)に登録している関東甲信越地方(東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県、茨城県、栃木県、群馬県、新潟県、長野県、山梨県)の介護福祉士養成校について、レクリエーション科目の有無と、取得可能なレクリエーション資格について、パンフレット及びホームページをもとに調査を行った。

2. 介護福祉士養成校に在籍の学生に対する質問紙調査

介護福祉士養成校に在籍している学生158名について、質問紙調査を実施。

調査内容として、通学する養成校で取得可能な資格、レクリエーション授業の有無・履修時期、実習Ⅰ、実習Ⅱについて実習先の形態、実習先でのレクリエーションの有無、実施していたレクリエーションの種類、実習生が企画したレクリエーションで参考にしたこと、学校でのレクリエーションを

参考にした場合の参考にした内容、レクリエーションの勉強の必要性、勉強が必要な講義、実技の内容について調査した。

(1) データ収集期間

平成24年10月1日～10月31日

(2) データ収集方法

介護教員講習会に参加した受講生が有志にて行っている、「介護福祉教育実践研究会」に参加している介護福祉養成校の教員にアンケートを依頼し、同意を得られた2校に在籍する学生及び、東北福祉大学通信制大学院の学生である介護福祉士養成校1校2学科の教員合計3校4学科158名(なお、設問項目の実習Ⅰについては158人、実習Ⅱについては2年生77人)に依頼し、質問紙による調査を実施した。回収率は100%であった。

IV. 倫理的配慮

各介護福祉士養成校の学校長に、研究の目的、方法、倫理的配慮について口頭と文書で説明し実施の許諾を得た。また調査対象者に、研究の目的、方法を口頭と文書で説明し、調査への協力は自由意志によるもので、協力せずとも不利益を被ることはなく、個人を特定することは一切せず、得られたデータは厳重に保管・処理して、本研究の目的以外には用いない事を確約した。調査票の回収については、個人が特定されないよう1通ずつ封筒に入れてもらい回収を行った。なお、調査対象者の同意確認は、調査票への記入と調査票の提出によって同意したものとみなした。

V. 介護福祉士養成におけるレクリエーションについての先行研究

社会福祉施設で実習した学生のレクリエーション支援の実態について調査した、森田(2003)¹⁾は、『実習中でのレクリエーション支援の実態については、ほとんどの学生が何らかの形でレクリエーション支援を経験し

ており、実習中のレクリエーション活動内容は、音楽を利用した活動が多かった。また、そのほとんどの活動が授業で実施した内容であった。授業への要望では、対象別・障害者別に応じたレクリエーション、簡単なレクリエーション、見せるためのレクリエーションという3種類の指導方法を授業内容に盛り込む事が要望されていた。その中で、レクリエーション計画の立案方法に重点をおき、対象者に合わせたアレンジ方法を提示していく必要がある、これらを授業でフィードバックしていく事で、実践的に活用できる教育内容になる』と述べている。

また介護福祉士養成校における、第3段階実習での個別援助計画と第2段階実習でのレクリエーション支援の実態から個別援助計画への関わりを調査した、岡本ら（2005）²⁾は、『介護実践でレクリエーション財を使用した全ケースのうち7ケース（48.3%）が「散歩」を行っていたが、生活ニーズのアセスメントから導き出したものではなく、介護実践過程を計画するプロセスを経ていなかった。また、実習生が実践した実践内容のほとんどは集団レクリエーションであり、担当者として援助を行った経験をした学生の50%以上は、「レクリエーションに最も必要なことはレクリエーション財の多さ」と回答していると述べている。このことから、「レクリエーション活動援助法」は、情報の「分析」「統合」「課題」のプロセスの設定とそのプロセスごとの課題提供型の演習が必要であり、介護実践で採用したレクリエーション財の採用事由が「介護過程」と密接に関わることを認識させる授業展開が必要であることがポイントとなる事』を述べている。

VI. 研究結果

1. 介護福祉士養成校でのレクリエーション科目実施状況

（財）日本レクリエーション協会の課程認

定校は、全国321校、関東・甲信越地方で103校245学科あり、介護福祉士養成校も多く含まれている。

関東甲信越地方で、（社）日本介護福祉士養成施設協会（以後、介養協）に登録している介護福祉士養成校121校132学科のうち、（財）日本レクリエーション協会の課程認定校となっている介護福祉士養成校は50校53学科である。

つまり、関東甲信越地方の介養協に登録している介護福祉士養成校のうち41.3%が、（財）日本レクリエーション協会の課程認定校となっている。

レクリエーション協会の課程認定校では、主にレクリエーション・インストラクターや、福祉レクリエーション・ワーカーの養成をしている。

前述のとおり調査を行った結果、1年課程から4年課程を含めた全体として、レクリエーション科目を行っていたのは、83学科（62.9%）であり、レクリエーション科目を行っていなかったのは、49学科（37.1%）であった。（図1）

養成年限別に、レクリエーション科目の有無を見ていくと、保育士資格取得者が入学可能な1年課程では、レクリエーション科目有りが2学科（14.3%）、レクリエーション科目無しが12学科（85.7%）であった。（図2）

また、短大、専門学校を合わせた2年課程では、レクリエーション科目有りが62学科

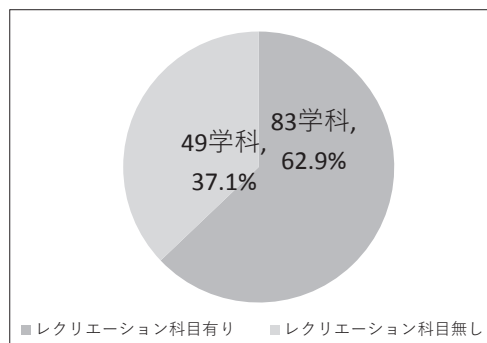


図1 関東甲信越地方 介護福祉士養成校レクリエーション科目の有無（全体）

(70.5%)、レクリエーション科目無しが26学科(29.5%)であった。(図3)

次に、3年制では、レクリエーション有りが3学科(50.0%)、レクリエーション無しが3学科(50.0%)(図4)であった。

4年制の大学ではレクリエーション科目有りが16学科(66.7%)、レクリエーション科目無しが8学科(33.3%)(図5)であった。

これらの調査から、2年制及び4年制の年限の介護福祉士養成校では、レクリエーション科目を何らかの形で行っている養成校が6割以上を占めていることが分かった。その反面、1年制の養成校では、年限が短いことから、レクリエーションを独自に行っている養成校

は全体の14.3%と少なくなっていると言える。また、3年制の年限の養成校は、関東甲信越地方で6校と少なく、レクリエーション科目を行っている養成校と行っていない養成校が、それぞれ5割を占めていた。

2. 介護福祉士養成校に在籍する学生に対する質問紙調査について

(1) 回答者の属性

女性94名(59.5%)、男性64名(40.5%)の合計158名であり女性が多かった。

調査対象者の基本属性を表1に示す。

なお、質問紙の設問で未記入の項目があった場合には、設問ごとに有効なものを、有効回答者数として集計した。

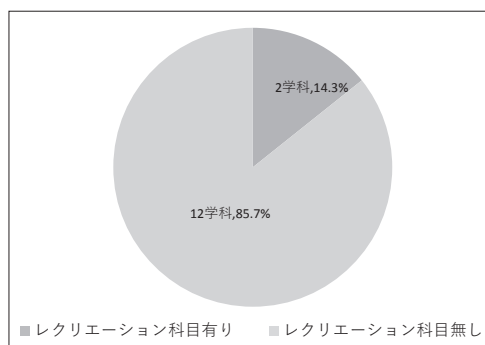


図2 関東甲信越地方 介護福祉士養成校レクリエーション科目の有無（1年制）

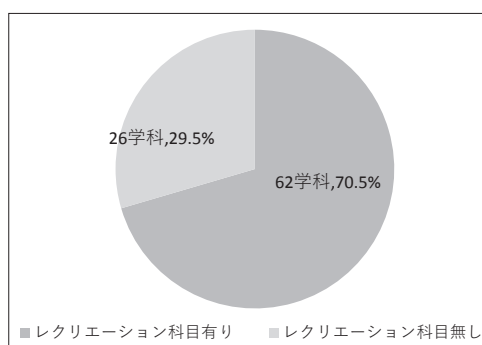


図3 関東甲信越地方 介護福祉士養成校レクリエーション科目の有無（2年制）

表1 調査対象者の基本属性

性別	女性	94人(59.5%)
	男性	64人(40.5%)
学校種別	2年制専門学校	104人(65.8%)
	3年制専門学校(夜間部)	1人(0.6%)
	2年制短期大学	53人(33.5%)
在籍学年	1年生	81人(51.3%)
	2年生	77人(48.7%)
取得可能な資格 (複数回答可)	介護福祉士	158人(100%)
	レクリエーション・インストラクター	119人(75.3%)
	社会福祉主事	24人(15.2%)
	社会福祉士	2人(1.3%)
	ピアヘルパー	18人(11.4%)
	情報処理士	10人(6.3%)
	アロマ検定	7人(4.4%)
	福祉住環境コーディネーター	4人(2.5%)
	その他	4人(2.5%)

(2) 質問紙調査について

- ① 学校（学科）では、レクリエーションの授業は行われているかとの問い（有効回答 157 人）に対し「必修科目」として行われているのは、「99 人（62.7%）」であった。

また、「選択科目として行われている」のは、「57 人（36.1%）」であった。そして「独立の科目としては行われていないが、他科目の授業で行う事がある」のは、「1 人（0.6%）」であり、「行われていない」のは、「0 人（0.0%）」であり、9 割以上の養成校で何らかの形でレクリエーションの授業が行われていた。（図 6）

- ② レクリエーションの科目の履修時期については、「1 年生前期 40 人（25.3%）」、「1 年生後期 37 人（23.4%）」、「2 年生前期 125 人（79.1%）」、「2 年生後期 108 人（68.4%）」であり、2 年生前期が最も多かった。

なお、履修時期については、前期・後期

を通して授業を行う通年授業や、2 年間を通じて授業を行っている場合もあるため、複数回答可としている。（図 7）

- ③ 実習 I（1 回目）初めての介護実習を行った施設については、有効回答 153 人中、「特別養護老人ホーム（従来型）25 人（16.3%）」、「特別養護老人ホーム（ユニット型）18 人（11.8%）」、「老人保健施設、23 人（15.0%）」、「グループホーム 66 人（43.1%）」、「小規模多機能、4 人（2.6%）」、「デイサービス 6 人（3.9%）」、「デイケア 4 人（2.6%）」、「訪問介護 0 人（0.0%）」、「障害者支援施設 6 人（3.9%）」、「その他 1 名（0.7%）」であり、グループホームでの介護実習が最も多く、次いで特別養護老人ホーム（従来型）、老人保健施設の順に多かった。（図 8）
- ④ 実習 I（1 回目）初めての実習の時期については、有効回答 154 名中、「1 年生前期 3 人（1.9%）」、「1 年生夏休み 78 人

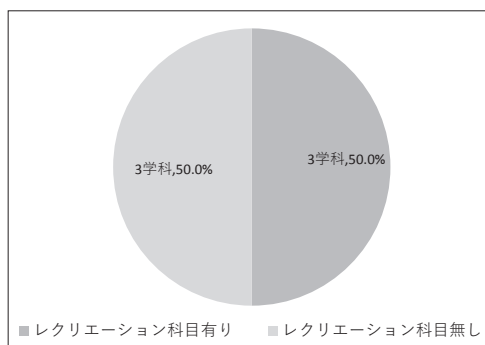


図 4 関東甲信越地方 介護福祉士養成校レクリエーション科目の有無（3 年制）

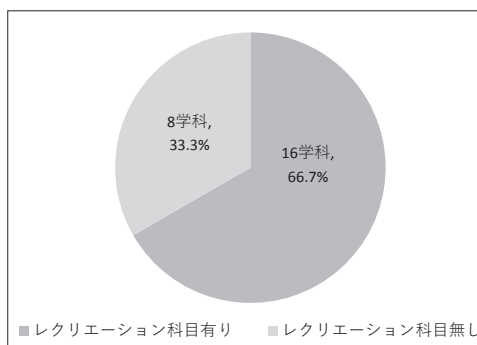


図 5 関東甲信越地方 介護福祉士養成校レクリエーション科目の有無（4 年制）

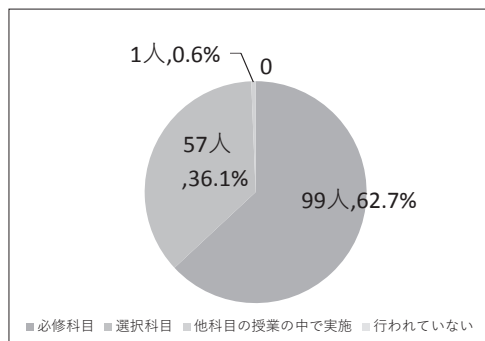


図 6 レク授業の有無

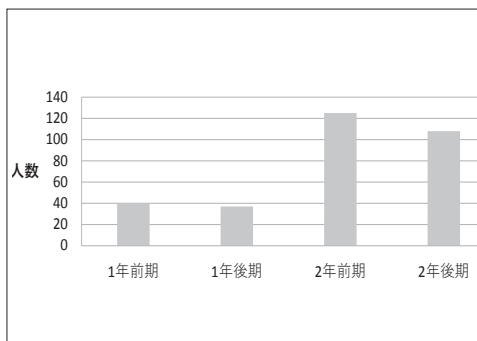


図 7 レク履修時期

(50.6%)、「1年生後期73人(47.4%)」、「1年生春休み0人(0.0%)」、「2年生前期0人(0.0%)」、「2年生夏休み0人(0.0%)」、「2年生後期0人(0.0%)」、「2年生春休み0人(0.0%)」であり、1年生夏休みが最も多く、次いで1年生後期が多かった。(図9)

⑤ 実習Ⅰ(1回目)の実習の際、施設でレクリエーションを実施したかについては、有効回答154名中、「実習生(自分)が中心となり企画し、レクリエーションを行った25人(16.2%)」「職員が中心となり行い、実習生(自分)も参加した102人(66.2%)」「他の職員が行っていたが、実習生(自分)は参加していない5人(3.2%)」「実習施設で行っていなかった22人(14.3%)」であり、職員が中心となり行い、実習生も参加した人が最も多かった。(図10)

⑥ 実習Ⅰ(1回目)の実習において、実習施設で何らかのレクリエーションを実施し

ていたと回答した人(132人)について、どのようなレクリエーションを行っていたか(複数回答可)の問いに対し、上位の内容として、「ラジオ体操37人(28.0%)」、「体操67人(50.8%)」、「嚙下体操61人(46.2%)」、「風船バレー45人(34.1%)」、「歌73人(55.3%)」、「カラオケ34人(25.8%)」、「クイズ28人(21.2%)」、「塗り絵38人(28.8%)」、「書道27人(20.5%)」であった。なお、その他の結果については、(図11)に詳細を示す。

⑦ 実習Ⅰ(1回目)の実習において、「実習生(自分)が中心となり、レクリエーションを実施した人25人」について「企画したレクリエーションは、何を参考にしたか」を複数回答可として調査したところ、「普段、施設で行っているレクリエーションを参考にした10人(40.0%)」、「学校で学んだレクリエーションを参考にした4人

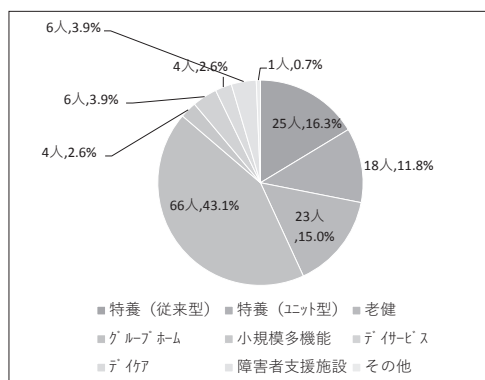


図8 実習Ⅰ 実習種別

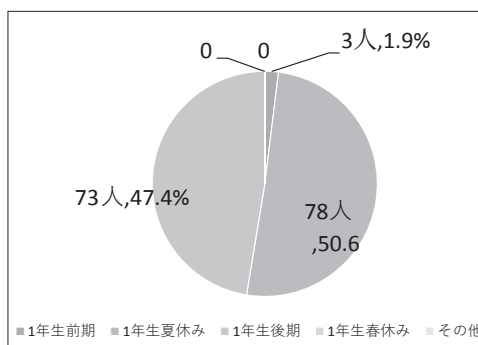


図9 実習Ⅰ 実習時期

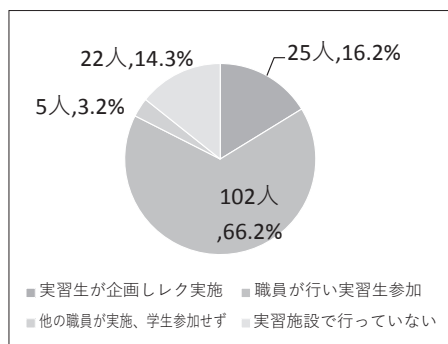


図10 実習Ⅰ レク実施の有無

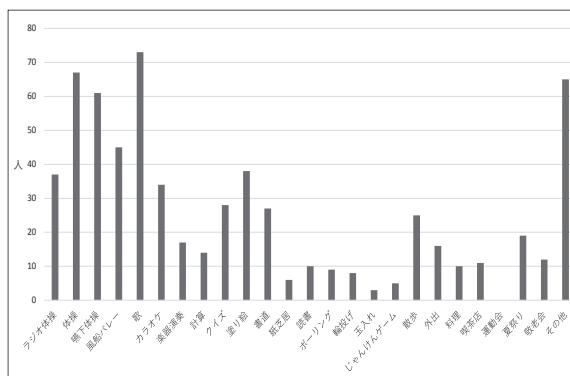


図11 実習Ⅰで実施されていたレク

(16.0%)」、「自分で、レクリエーションの本で調べて参考にした3人(12.0%)」、「自分で、ネットを検索して参考にした3人(12.0%)」、「その他9人(36.0%)」となっており、普段、施設で行っているレクリエーションを参考にした人が多かった。(図12)

その他参考としたものとして、「認知症予防ゲーム、スリーA」、「母親から教わった」、「施設内のレク材を見て考えた」、「他の実習生のアイデア」、「自分で考えた」となっている。

- ⑧ 実習Ⅰ（初めて）の実習について、「実習生（自分）が中心となり、レクリエーションを実施した人」の中で、「学校で学んだレクリエーションを参考にした4人(16.0%)」について、学校で学んだどのようなレクリエーションを参考にしたか調査したところ、「ベルを使用したレク」、「生活支援技術Ⅱの資料」、「自己紹介」、「後出

じゃんけん」との回答があった。

- ⑨ 実習Ⅱ（最終実習）において、介護福祉実習を行った施設については、「特別養護老人ホーム（従来型）28人(37.8%)」、「特養（ユニット型）12人(16.2%)」、「介護老人保健施設、25人(33.8%)」、「グループホーム0人(0.0%)」、「小規模多機能、1人(1.4%)」、「デイサービス0人(0.0%)」、「デイケア0人(0.0%)」、「訪問介護1人(1.4%)」、「障害者支援施設、1人(1.4%)」、「その他6名(8.1%)」であり、特別養護老人ホーム（従来型）が最も多く、次いで老人保健施設が多かった。なお有効回答者は74名。(図13)

- ⑩ 実習Ⅱ（最終実習）の時期については有効回答75名中、「1年生前期0人(0.0%)」、「1年生夏休み0人(0.0%)」、「1年生後期1人(1.3%)」、「1年生春休み0人(0.0%)」、「2年生前期20人(26.7%)」、「2年生夏休み54人(72.0%)」、「2年生後期0人(0.0%)」、「2年生春休み0人(0.0%)」であり、2年生夏休みが最も多く、次いで2年生前期が多かった。(図14)

- ⑪ 実習Ⅱ（最終実習）の際、施設でのレクリエーションを実施したかについては、有効回答75名中、「実習生（自分）が中心となり企画し、レクリエーションを行った31人(41.3%)」、「職員が中心となり行い、実習生（自分）も参加した31人(41.3%)」、「他の職員が行っていたが、実習生（自分）

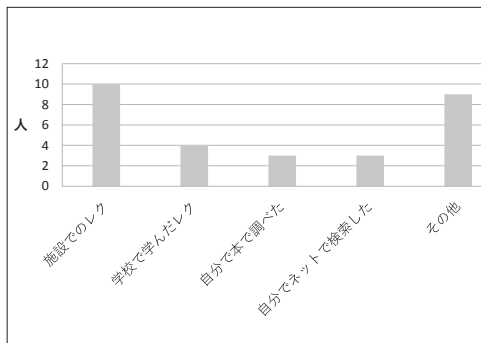


図12 実習Ⅰ企画したレクについて参考にしたもの

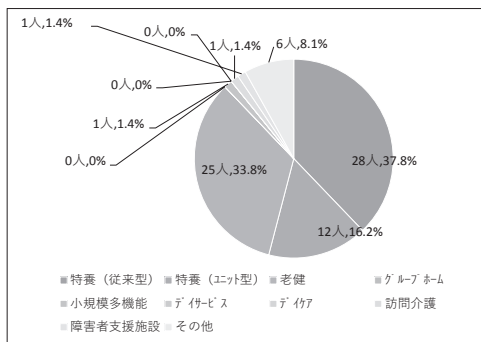


図13 実習Ⅱ 実習種別

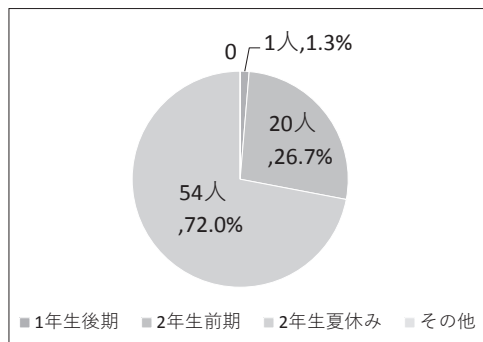


図14 実習Ⅱ 実習時期

は参加していない3人(4.0%)」「実習施設で行っていなかった10人(13.3%)」であり、実習生(自分)が中心となり企画し、レクリエーションを行った人と、職員が中心となり、実習生も参加した人が31人ずつと最も多く、実習Ⅱ(最終実習)でレクリエーションを自分で企画したり、何らかの形で行っていた人が多かった。(図15)

- ⑫ 実習Ⅱ(最終実習)において、実習施設で何らかのレクリエーションを実施していたと回答した人65人についてどのようなレクリエーションを行っていたか(複数回答可)の問いに対し、上位の内容として、「ラジオ体操21人(32.3%)」、「体操34人(52.3%)」、「嚙下体操28人(43.1%)」、「風船バレー14人(21.5%)」、「歌35人(53.8%)」、「カラオケ20人(30.8%)」、「クイズ15人(23.1%)」、「塗り絵24人(36.9%)」、「書道19人(29.2%)」であった。なお、その他

の結果については、(図16)に詳細を示す。

- ⑬ 実習Ⅱ(最終実習)において、「実習生(自分)が中心となり、レクリエーションを実施した人31人」について、「企画したレクリエーションは、何を参考にしたか」を複数回答可として調査したところ、「普段、施設で行っているレクリエーションを参考にした18人(58.1%)」、「学校で学んだレクリエーションを参考にした6人(19.4%)」、「自分で、レクリエーションの本で調べて参考にした6人(19.4%)」、「自分で、ネットを検索して参考にした2人(6.5%)」、「その他5人(16.1%)」となっており、普段施設で行っているレクリエーションを参考にした人が58.1%と最も多かった。

その他参考としたものとして、「実習生同士相談した」、「前回の実習先のレクを参考にした」、「職員からの情報を参考にした」、「教員に相談した」となっていた。(図17)

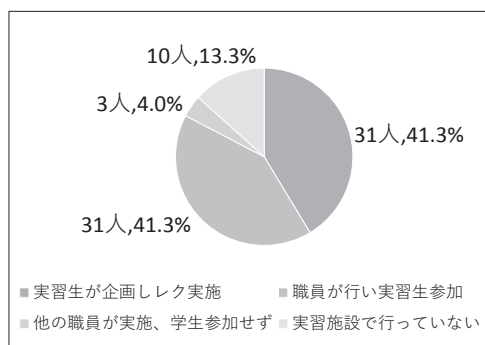


図15 実習Ⅱ レク実施の有無

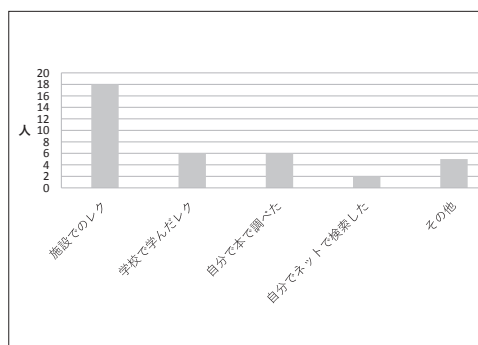


図17 実習Ⅱ企画したレクについて参考にしたもの

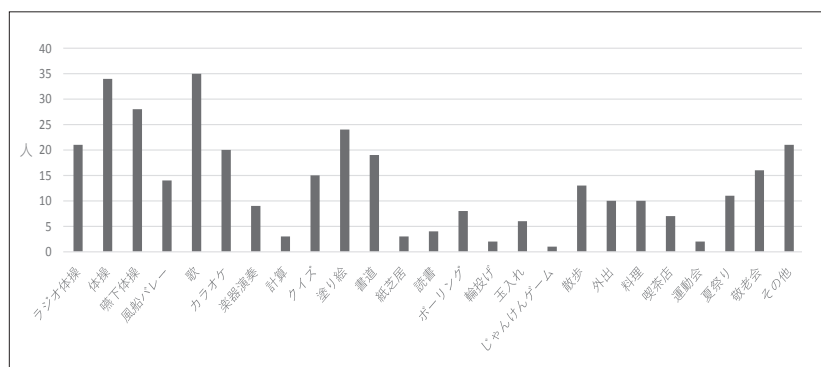


図16 実習Ⅱで実施されていたレク

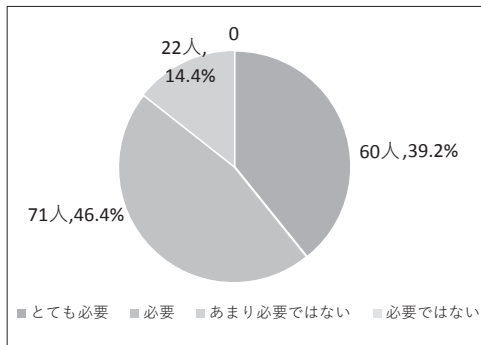


図 18 介護福祉士養成校においてレク勉強の必要性

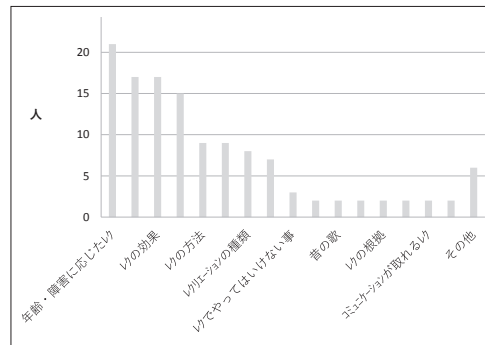


図 19 必要な講義の内容

- ⑭ 実習Ⅱ（最終実習）について、「実習生（自分）が中心となり、レクリエーションを実施した人 31 人」の中で、「学校で学んだレクリエーションを参考にした 6 人（17.1%）」について、学校で学んだどのようなレクリエーションを参考にしたか調査したところ、「厚紙に問題を作成（クイズ）」、「安心で部分的にでも皆が参加していると感じられるレク」、「紙芝居」、「歌に合わせて拍手する」との回答があった。
- ⑮ 介護福祉士養成校において、レクリエーションの勉強は必要かとの問いに対し（有効回答 153 人中）、「とても必要 60 人（39.2%）」、「必要、71 人（46.4%）」、「あまり必要ではない 22 人（14.4%）」、「必要ではない 0 人（0.0%）」との回答であり、レクリエーションの勉強を必要だと考えている人が 8 割を超えていた。（図 18）
- ⑯ 介護福祉士養成校において、どのようなレクリエーションの勉強が必要かを自由回答にて 158 名に調査したところ、「レクリエーションに関する講義」については、「年齢・障害に応じたレクリエーション 21 人（13.3%）」、「プログラム・企画の立て方 17 人（10.8%）」、「レクリエーションの効果 17 人（10.8%）」、「レクリエーションの意義 15 人（9.5%）」、「レクリエーションの方法 9 人（5.7%）」、「人を楽しませるレクリエーション 9 人（5.7%）」、「レクリエーションの種類 8 人（5.1%）」、「利用者の心理 7

人（4.4%）」、「レクリエーションでやってはいけない事 3 人（1.9%）」、「リハビリ 2 人（1.3%）」、「昔の歌 2 人（1.3%）」、「個別レクリエーション 2 人（1.3%）」、「レクリエーションの根拠 2 人（1.3%）」、「講義はいらない 2 人（1.3%）」、「コミュニケーションが取れるレクリエーション 2 人（1.3%）」、「参加したがる人に参加してもらう方法 2 人（1.3%）」、「その他 6 人（3.8%）」との回答であり、年齢・障害に応じたレクリエーションが最も多く、次いで、プログラム・企画の立て方、レクリエーションの効果が多かった。（図 19）

- ⑰ 介護福祉士養成校において、どのようなレクリエーションの勉強が必要かを、自由回答にて 158 名に調査したところ、レクリエーションに関する実技については、「年齢・障害に応じたレクリエーション 17 人（10.8%）」、「回想法 16 人（10.1%）」、「レクリエーション体験（実践）14 人（8.9%）」、「レクリエーションのすすめ方 12 人（7.6%）」、「皆が楽しめるもの 11 人（7.0%）」、「運動になるレクリエーション 8 人（5.1%）」、「いろいろなレクリエーションの種類 8 人（5.1%）」、「皆で出来る体操 8 人（5.1%）」、「折り紙 6 人（3.8%）」、「作品作り（絵・工作など）4 人（2.5%）」、「物を使わないレクリエーション 4 人（2.5%）」、「集団レクリエーション 4 人（2.5%）」、「雰囲気作り 3 人（1.9%）」、「ゲーム 3 人（1.9%）」、「リハ

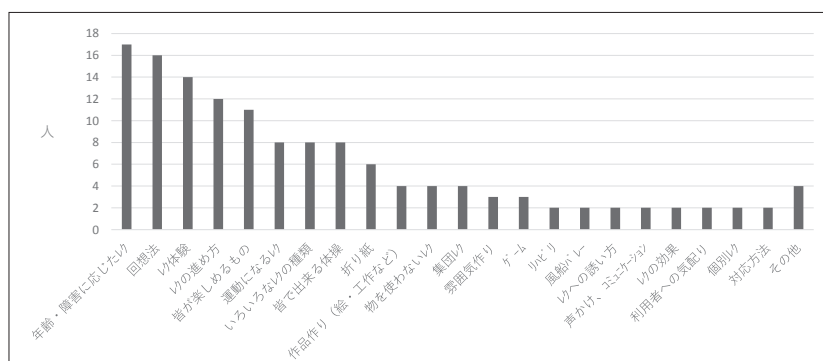


図 20 必要な実技の内容

ビリ 2 人(1.3%)」、「風船バレー 2 人(1.3%)」、「レクリエーションへの誘い方 2 人(1.3%)」、「レクリエーションの効果 2 人(1.3%)」、「利用者への気配り 2 人(1.3%)」、「個別レクリエーション 2 人(1.3%)」、「対応方法 2 人(1.3%)」、「その他 4 人(2.5%)」回答であり、最も多かったのは、「年齢・障害に応じたレクリエーション」であり、次いで「回想法」、「レクリエーション体験(実践)」であった。(図 20)

VII. 考察

1. 介護福祉士養成校でのレクリエーション科目実施状況

介護福祉士養成施設協会(介養協)に登録している、関東北信越地方の介護福祉士養成校では、レクリエーション科目を独自の科目として行っていたのは、83 学科(62.9%)であり、レクリエーション科目を行っていないのは、49 学科(37.1%)であった。この結果から、新カリキュラムにおいて無くなってしまったレクリエーションの科目を、その必要性から養成校が独自の科目として、行っていることが明らかとなった。

2. 介護福祉士養成校に在籍する学生に対するアンケートについての考察

在校している養成校で取得可能な資格としては、介護福祉士資格の他に、レクリエーシ

ョン・インストラクターが 75.3%と圧倒的に多かった。

本研究で調査した介護福祉士養成校では、全体の約 75%でレクリエーション・インストラクターの資格を同時に取得する事が可能であった。

介護福祉士養成校に在籍する学生に対するアンケートにおいて、学校(学科)ではレクリエーションの授業が行われているのに対し、必修科目として 99 人(62.7%)が行っていた。また、選択科目として 57 人(36.1%)がレクリエーションの科目を行っていた。これらから、介護福祉士養成校では、6 割以上の学生が必修科目としてレクリエーションを行っており、選択科目で行っている学生を含めると、「156 人(98.7%)」が、何らかの形でレクリエーションを行っていた。

またレクリエーションの履修時期について、1 番多いのは 2 年生前期であり、この時期までに、回答者が在学する養成校の約 8 割で、何らかのレクリエーションの科目を行っていた。

介護福祉士養成校の学生が、実習Ⅰ(1 回目)の初めての介護実習を行った施設について 1 番多かったのは、「グループホーム 66 人(43.1%)」であり、次いで、「特養(従来型) 25 人(16.3%)」、「老人保健施設 23 人(15%)」であった。介護福祉士養成教育における、新カリキュラムが、2009(平成 21)年 4 月より導入され、実習施設・事業等(Ⅰ)の基準

が変更された。新カリキュラムでは、「利用者の暮らしや住まい等の日常生活の理解や多様な介護サービスの理解を行う事ができるよう、利用者の生活の場として、小規模多機能型居宅介護事業、認知症対応型老人共同生活援助事業等を始めとして、居宅サービスを中心とする多様な介護現場を確保するために、介護保険法その他の関係法令に基づく職員の配置に係る要件を満たすこと以外には、特段の要件は求めない。」としていることから、実習Ⅰにおいては認知症対応型共同生活介護（以下グループホーム）での実習を行っている学校（学生）が多かったのではないかと考える。

またグループホームの入所者は、何らかの認知症を有しているため、介護職や学生がおこなうレクリエーションについても、認知症の方が理解しやすく楽しめるようなもの、つまり対象者にあったレクリエーションを実施していく必要があると考える。

実習Ⅰ（1回目）初めての实習の時期については、1番目に多いのが、「1年生夏休み 78人（50.6%）」であり、次いで「1年生後期 73人（47.4%）」となっている。先に述べたレクリエーションの履修時期が、1番多いのは2年生前期であり、2番目に多い2年生後期と合わせると75.1%を占めていたことから、実習Ⅰ（1回目）初めての实習については、7割以上の学生がレクリエーションを履修しておらず、学校で学ぶレクリエーションの知識や技術がほとんどない状態で、実習を行っている事が分かった。

実習Ⅰ（1回目）の実習の際、施設でのレクリエーションを実施したかについて1番多かったのは、「職員が中心となり行い、実習生（自分）も参加した102人（66.2%）」であった。また、「実習生（自分）が中心となり企画し、レクリエーションを実施した25人（16.2%）」であった。これらを合わせると、127人（82.4%）の学生が、何らかのレクリエー

ションに参加していることが分かった。また実習施設において、レクリエーションを実施していなかったのは、22人（14.3%）であり、85.0%以上の実習施設において、何らかのレクリエーションを実施していた事が分かった。

実習Ⅰ（1回目）の実習において、どのようなレクリエーションを実施していたかについて複数回答可で調査した所、幅広く、いろいろなレクリエーションを実施していた。その中で1番行っているレクリエーションが多かったのは、「歌 73人（55.3%）」であり、次いで「体操 67人（50.8%）」、「嚥下体操 61人（46.2%）」であった。

実習Ⅰの初めての实習において、学生が企画したレクリエーションは、何を参考にしたかについて調査したところ、1番多かったのは、「普段、施設で行っているレクリエーションを参考にした10人（40.0%）」であった。先に述べたように実習Ⅰの履修時期では、学校でまだレクリエーションを履修していない学生が多く、レクリエーションの知識は少ないと考えられる。そのため、自分がレクリエーションを企画する際に、施設で行っているレクリエーションを参考にして行う学生が多いのではないかと考えられる。

実習Ⅰ（初めて）の実習において、「実習生（自分）が中心となり、レクリエーションを実施した人」の中で、学校で学んだレクリエーションを参考にした人4人に、そのようなレクリエーションを参考にしたかについて調査した結果、自己紹介や、後出しじゃんけんなど、レクリエーションの最初に行う、アイスブレイキングに使用される技術を参考にしていると回答していた。また、レクリエーションに特化した授業ではないものの、「生活支援技術Ⅱ」の授業での資料を、実習で参考にしていた。

介護福祉士養成校の学生が、実習Ⅱ（最終実習）において介護実習を行った施設につい

て1番多かったのは、「特別養護老人ホーム（従来型）、28人（37.8%）」であった。

次いで、「老人保健施設25人（33.8%）」、「特別養護老人ホーム（ユニット型）12人（16.2%）」であった。実習Ⅱにおいては、実習施設の要件として、「実習指導マニュアルを整備し、実習指導者を核とした実習指導体制を確保できるよう、常勤の介護職員に占める介護福祉士の比率が3割以上であること。」等、厳しい要件となっている。

また実習指導者についても、実習Ⅰについては、「介護福祉士の資格を有する者又は3年以上介護業務に従事した経験のある者」として、要件を緩和しているのに対し、実習Ⅱでは、原則として、介護福祉士として3年以上実務に従事した経験があり、かつ、実習指導者研修課程を修了した者として、要件を強化している。このことから、本研究においても実習Ⅱ（最終実習）の学生の実習先として、これらの要件をクリア出来る特別養護老人ホーム（従来型）や、特別養護老人ホーム（ユニット型）や、老人保健施設が多かったと考えられる。

実習Ⅱ（最終実習）の介護福祉実習の時期については、1番目に多いのが「2年生夏休み54人（72.0%）」であり、次いで「2年生前期20人（26.7%）」となっており、1年後期に行った1人（1.3%）を除き、実習Ⅱは2年生で実施されていた。そのため、実習Ⅰと実習Ⅱの結果については、単純には比較が困難であると考えられる。

それを踏まえた上で、先に述べた、レクリエーションの履修時期が1番多いのは2年生前期であり、1年生の時に履修している人を合わせると約8割の養成校で、実習Ⅱの介護福祉実習に行く前に、レクリエーションの授業が行われており、何らかのレクリエーションの知識や技術を学んでから、実習へ行っていると考えられる。

実習Ⅱ（最終実習）際、施設でのレクリエー

ションを実施したかについて、1番多かったのは、「実習生（自分）が中心となり企画し、レクリエーションを行った31人（45.3%）」と「職員が中心となり行い、実習生（自分）も参加した31人（45.3%）」が同人数であった。これらを合わせると、62人（90.6%）の学生が、自分も何らかのレクリエーションに参加しており、実際に、実習生が中心となり、レクリエーションを実施した人も、半分近くいることが分かる。実習Ⅰにおいては、実習生が中心となりレクリエーションを実施したのは、25人（16.2%）であった。実習Ⅰは調査対象者158人であるのに対し、実習Ⅱは2年生77人からの回答であり、単純に比較する事は困難であるが、実習Ⅰに比べると、実習Ⅱの方が、レクリエーションを企画する機会が多いという事が分かった。

実習Ⅱ（最終実習）において、どのようなレクリエーションを実施していたかについて複数回答可で調査した所、さまざまなレクリエーションを行っていた。その中で、1番行っているレクリエーションが多かったのは、「歌35人（53.8%）」であり、次いで「体操34人（52.3%）」、「嚙下体操28人（43.1%）」であった。実習Ⅰにおいても、行っているレクリエーションが1番多かったのは歌であり、次いで体操、嚙下体操の順であり、実習Ⅱと同じ結果であった。

実習Ⅱ（最終実習）において、学生が企画したレクリエーションは、何を参考にしたかについて複数回答可にて調査したところ、1番多かったのは、「普段、施設で行っているレクリエーションを参考にした18人（58.1%）」であった。次いで、「学校で学んだレクリエーションを参考にした6人（19.4%）」、「自分で、レクリエーションの本で調べて参考にした6人（19.4%）」であった。実習Ⅱ（最終実習）では、先に述べたように、約8割の人が養成校においてレクリエーションの授業が行われており、何らかのレクリ

エーションの知識や技術を学んでから、実習へ行っていると考えられる。それにも関わらず、学生が企画したレクリエーションでは、学校で学んだレクリエーションを参考にするよりも、普段、施設で行われているレクリエーションを参考にしており、学校での学びが実践に活かされていない課題が明らかとなった。

しかし施設に入所している利用者にとって実習生が行うレクリエーションは、普段マンネリで行っているものではなく、初めて行う新鮮なレクリエーションであり、生活を活性化させる良い機会となる。

吉田（2019）³⁾が行った調査結果から、『施設の現場職員は施設でのレクリエーションの課題を、「いつも同じようなレクリエーションになりマンネリである 64 人（66.7%）」、「レクリエーションのアイディアが浮かばない 42 人（43.8%）」と考えており、レクリエーションの知識が足りずにレクリエーションを考えることに困難がある福祉の職員が半数以上を占めている』事が分かった。

介護福祉士養成校の学生にとって実習は、それまで養成校で学んだ知識・技術を統合し、実践していく場であると考えられる。そのため、養成校ですでにレクリエーションを学んだ学生については、実践の場である実習施設において、レクリエーションの企画・実行を行う際には、すでに施設で行っているレクリエーションを参考にし、同じようなレクリエーションを行うのではなく、学校で学んだレクリエーションの知識・技術を基礎としながら自分なりに応用し、現場の利用者の状態に応じた、新しい新鮮なレクリエーションを行っていくことが必要ではないかと考える。

介護福祉士養成校に在籍する学生は、養成校でのレクリエーションの勉強について、「とても必要 60 人（39.2%）」、「必要 71 人（46.4%）」を合わせると、131 名（85.6%）が、必要であると回答している。レクリエーションの勉強

強は、介護福祉士養成において必要であると、学生は感じている事が分かる。

介護福祉士養成校において、どのようなレクリエーションの講義が必要かについて 1 番多かったのは、「年齢・障害に応じたレクリエーション 21 人（13.3%）」、「プログラム・企画の立て方、17 人（10.8%）」、「レクリエーションの効果 17 人（10.8%）」が挙げられている。介護福祉士は、何らかの障害を持った利用者に対し援助を行う事から、レクリエーションについても、障害に応じたレクリエーションの知識が求められていると思われる。

また、レクリエーションの効果について知る事で、利用者の援助に生かしていくことが出来ると共に、レクリエーションを行う際は、プログラムや企画の立て方が重要であり、その方法について学ぶ必要があると学生は考えていると言える。

介護福祉士養成校において、どのようなレクリエーションに関する実技が必要かについて 1 番多かったのは、「年齢・障害に応じたレクリエーション 17 人（10.8%）」であった。次いで、「回想法 16 人（10.1%）」、「レクリエーション体験（実践）14 人（8.9%）」であった。

「年齢・障害に応じたレクリエーション」については、必要なレクリエーションに関する講義についても、1 番に回答が多くなっており何らかの障害を持つ利用者を対象に援助を行う介護福祉士にとって、必要な知識・技術であると言える。2 番目に回答が多かった「回想法」については、認知症高齢者に有効であると考えられており、認知症高齢者を支援する機会が多い介護福祉士にとって必要な技術であると考えられる。3 番目に多かった「レクリエーション体験（実践）」については、レクリエーションを実際に行い体験する事が必要であると学生が考えていると言える。

しかし、養成校に在籍する学生については、学校で学んだレクリエーションを、実習の際に活用しておらず、施設で行っているレクリ

エーションを参考にして、同じようなレクリエーションを行っていることが明らかとなった。そのため、学校で学んだレクリエーションの知識・技術を、実習時に実践し、高めていくことができるように、養成校の教員は指導していくことが必要であると考え。

また実習生が、学校で学んだ新しい新鮮なレクリエーションを、実習の場である施設で行う事で、介護福祉士を含めた福祉の職員も、レクリエーションについてのアイデアを共有し、活用していくが出来ると考える。福祉の職場の課題である、「アイデアが浮かばず、いつも同じようなレクリエーションになりマンネリである」という問題が、解決するためのヒントとなるのではないかと考える。

以上の調査結果から、介護福祉士養成校における新カリキュラムで独自の科目として無くなってしまったレクリエーションについての知識や技術は、介護福祉士にとって必要であることが明らかとなった。

今後も介護福祉士養成の科目の中に、レクリエーションを組み込み実践していくことで、利用者がいきいきと楽しみや生きがいを持って生活していけるよう、「生活の快」を支援していくことが可能となると考える。

介護福祉士にとって必要な知識・技術であるレクリエーションを、介護福祉士養成教育の中でどのように組み込み、実践で活かしていくのかを、今後も研究を通して明らかにしていくと共に、今後より重要性が増すと考えられる、認知症高齢者に対するレクリエーション実践のあり方や課題についても、さらに明らかにしていきたいと考える。

VIII. 研究の限界及び今後の課題

介護福祉士養成校の学生については、施設での介護実習時に学校で学んだレクリエーションをほとんど行っていなかった。しかし本研究では、その理由についての設問は設定しておらず、なぜ学校で学んだレクリエー

ションの知識・技術を実習時に活用しなかったのかについて、明確な理由は明らかになっていない。今後の研究で明らかにしていきたいと考える。

引用文献

- 1) 森田清美 「社会福祉領域の専攻学生におけるレクリエーション教育のあり方」『保健福祉学研究』, 1号, pp.83-95,2003
- 2) 岡本浄実, 熊崎百代, 村上逸人, 今泉雅博 「個別援助計画におけるレクリエーション援助の現状と課題」,『愛知新城大学研究紀要』(2), pp.41-47,2005
- 3) 吉田志保,「介護福祉施設におけるレクリエーション実践と介護福祉士養成校の学生に求められる知識・技術に関する一考察」, 佐野日本大学短期大学研究紀要 第30号 ,pp.13-25,2019

参考文献

- 1) (財) 日本レクリエーション協会編 『レクリエーション支援の基礎―楽しさ・心地よさを活かす理論と技術―』, (財) 日本レクリエーション協会, 2009
- 2) 垣内芳子・大場敏治・藺田碩哉編 『介護福祉士選書・6 改訂 レクリエーション指導法』, 建帛社, 1994